

「『カルピス』づくりによるコミュニケーション発達支援セミナー」を開催

(2016年12月26日、アサヒグループホールディングス(株)本社にて)

実践女子大学・長崎研究室企画・アサヒグループホールディングス(株)後援のセミナーが、2016年12月26日(月)午後1時～5時30分まで、浅草の隅田川沿いのアサヒグループホールディングス株式会社・本社ビルで開催されました。

長崎ゼミでは、2015年度、2016年度にカルピス(株)、アサヒグループホールディングス(株)と共同研究を行い、「カルピス」づくりを通じたコミュニケーション発達支援の研究を行ってきました。生活の中での心の動きと支援について、3、4年生合同のゼミとして取り組んだものでした。その成果を学会等で報告したところ、関心を持つ方々が増え、様々な教育・療育の発達支援の現場で「カルピス」づくりを通じたコミュニケーション発達支援の実践が行われはじめました。



【写真1】 セミナー前半の様子

そこで、実践されはじめた現場の方々と、大学の研究者が一同に集まり、「『カルピス』づくり」の背景や支援スキルを共有し、また実践現場の情報交換と交流の時を持つということになりました。

日本の文化の中で約100年かけて醸成されてきた「カルピス」をつくることには、乳幼児から中学・高校生徒、あるいは、高齢者にいたるまでのコミュニケーションの要素(好みの濃さや量の選択、他者の意図理解、情動調整活動など)が多様に含まれており、そのため支援の可能性も豊かに含まれてい

ます。

なによりも、一杯の「カルピス」を一緒に作って飲んで、ほっとし、「おいしいね」と微笑み合うことは、インターネットなどを介するコミュニケーションと対極的な、時間と空間、身体性を共有したコミュニケーションでしょう。

参加者は、発達支援の現場で「カルピス」づくりを使い始めた先生方13名、実践女子大学長崎ゼミから3名の4年生、白百合女子大学の田島信元先生、三木陽子先生、山梨大学の吉井勘人先生、アサヒグループホールディングス(株)からは、研究員や企画・広報担当者の10名の方々でした。

<親子での「カルピス」づくりの意義を考える>

まず、アサヒグループホールディングス(株)が研究してきた、親子による「カルピス」づくりのコミュニケーション発達支援研究について、コアテクノロジー研究所の小谷恵氏から報告がありました。100組以上の親子の観察研究、質問紙調査による分析(共分散構造分析など)から、「カルピス」づくりでの親が子どもを支援する働きかけが、社会的スキルや問題解決へのチャレンジ、旺盛な好奇心などの子どもの学習を促し、認知・社会性の発達に影響があることが示された研究(小谷ら,2016他)について報告がされました(Fig.1)。

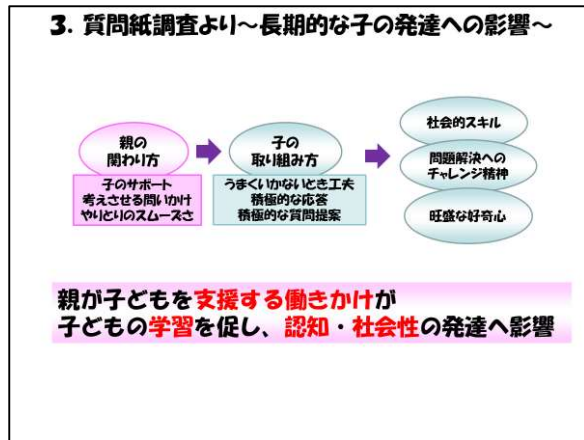


Fig.1 親子による「カルピス」づくりの子の発達への影響(小谷ら(2016)より)

Fig.1にも示されているように、典型発達児でも、障害をもつ子どもでも、「親が子どもを支援する働きかけ」の意味と重要性は共通であることが分かります。

また、山梨大学の吉井勘人先生より、「カルピス」づくりのような生活や遊びの型(フォーマット)が、子どもの発達や支援にどのような意味があるのかについてのお話をいただきました。

<『「カルピス」づくりによるコミュニケーション発達支援プログラム』の紹介>

次に、現在、実践女子大学長崎研究室で開発・実践中の「発達障害児に対する『カルピス』づくりによるコミュニケーションの発達支援プログラム」の概要と、段階的援助による支援のポイントについて説明をしました。枠組としては、「自己に向かった活動→他者に向かった活動→他者の意図への関心→他者意図理解→小グループによる協同活動」ですが、実践者の様々なアイデアと方法でプログラムを生成して欲しいと話させていただきました。

セミナー前半のまとめとして、白百合女子大学の田島信元先生から、能力を個体の所有物と見なすのではなく、個と個の間や文脈の中にあることという観点の重要性、支援においても対等な人と人との「対話」であることの重要性についてコメントをいただきました。また三木陽子先生からは、発達臨床・支援現場での「カルピス」づくりの今後の応用の可能性についてお話がありました。

<ワークショップ(ロール・プレー)>

浅草名物の人形焼きを頂きながらのおやつ休憩の後、効果的な支援とするための、大人の側の適切なかわり方(段階的援助)についてのワークショップ(ロール・プレー)を行いました。



【写真2】 ワークショップ①:段階的援助のモデルとアセスメントの演習の様子



【写真3】 ワークショップ②:アセスメントに基づく参加者による指導のロール・プレーの様子

最初に長崎ゼミの4年生が、子ども、母親、補助指導者役となり、長崎が指導者役となり、子どものアセスメントを参加者全員でしてみました(【写真2】)。その後、参加者が指導者役となり、そのアセスメントに基づき、支援目標を立て、支援をシュミレーションしてみました(【写真3】)。

短い時間でしたが、4年生のロール・プレーが好評で、参加者からは支援方法のノウハウのイメージが良く持てたとの感想が多かったです。大勢の参加者に囲まれてのロール・プレーは緊張したことと思いますが、4年生が演じた子どもが「お母さん、白とオレンジの「カルピス」どっちが飲みたい？」と「カルピス」の味を尋ねた後、お母さんが選んだ「カルピス」を作ってあげて、お母さんの「ありがとう、美味しいよ」という言葉に喜びにっこり笑う様子が、「本当にうれしそうだしかわいかった！」と好評でした。ご苦労様でした！

<発達支援の現場では、今>

最後に、参加された現場の先生方から、それぞれの現場で、どのような子どもに、どのように「カルピス」づくりを通した発達支援を行っているかについて報告をしていただき、情報交換の時をもちました。

<人々をつなげる「カルピス」の力と「子どもの力」>

現在のわが国の制度・システムとしては、ほとんど出会うことのないであろう、福祉、教育、家族、企業、大学の人々がこうやって集い、共に学び、情報を共有し、つながる

ことができたこと自体が、奇跡のようです。それは「カルピス」の力でしょうか？また、「子どもたちの力」でしょうか？まさに異質な人・組織・コミュニティーをつなぐ「越境的（香川・青山,2015）な出来事」の感があったとの参加者の感想でした。

今後も継続的にこの様な場をもち、理論と実践、実践現場の方々同士がお互いに交流しながら、発達支援プログラムが豊かな樹に育ってくれることを願っています。



この様な機会を与えてくださり、計画、準備、実施に多大なる協力をいただいた、アサヒグループホールディングス(株)の皆様、年末のお忙しい時期にお越し下さった現場からの参加者の皆様、研究に協力して下さった子どもたち、またご家族の方々に、卒論の考察で頭を悩ませている最中にロール・プレーに協力して下さった長崎ゼミ4年生の皆さんに深く感謝申し上げます。

<文献>

- 香川秀太・青山征彦(編)(2015) 越境する対話と学びー異質な人・組織・コミュニティーをつなぐー. 新曜社.
- 小谷恵(2016) 親子「カルピス」づくりの発達の基礎研究紹介. 「『カルピス』づくりによるコミュニケーション発達支援セミナー」 配付資料
- 小谷恵・田島信元・三木陽子・宮下孝広・川口恭輔・大澤一仁・松浦啓一・大木浩司 (2013) 親子での飲料作成・飲料体験が親子関係および子どもの発達に及ぼす影響の検討:「カルピス」の親子共同作成・飲料体験の構造に関する予備研究. 生涯発達心理学研究(白百合女子大学生涯発達センター紀要)、第5号 143 - 153.
- 小谷恵・田島信元・三木陽子・宮下孝広・川口恭輔・大澤一仁・松浦啓一・大木浩司(2016) 希釈タイプの乳酸菌飲料「カルピス」の親子作製・飲用体験における親子の関わり合いのあり方と子どもの発達との関連性. 生涯発達心理学研究(白百合女子大学生涯発達研究教育センター紀要)、第8号 89-98.
- 長崎 勤・吉井勘人(2015) 社会語用論的アプローチ 尾崎康子・三宅篤子(編) 知っておきたい発達障害の療育(乳幼児期における発達障害の理解と支援 2) pp.71-75.ミネルヴァ書房.
- 長崎 勤(2016) 発達障害のある子への認知・行動的アプローチ:「心の動き」への支援、その3ー「カルピス・カフェ」を通じた他者の意図理解・協同活動ー. LD,ADHD &ASD 学び方の違う子へのサポート No.7,2016年10月号,58-61.